

# 和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO 法人百年の森づくりの会

2014  
10.1

28号

巻頭言……………1 / 総会・活動報告会……………2-3 / 大陽寺事業の提案……………4-5 /

和名倉山森づくり報告……………5-6 / 長瀬町宝登山下刈り活動報告……………7 /

平成26年度 第7回通常総会開催……………7

## 後世に残そう森林遺産

理事長 坂本和穂

日本は世界に冠たる森林大国であり国土の六十・二%が森林である。

ちなみに、埼玉県は森林二十三%、農用地二十一%、宅地十九%、河川道路十四%、その他十四%である。しかしながら林業労働者は平成七年に六百六十一人だったのが平成二十二年には五百二十三人に激減した。

日本の森林は荒廃したのだろうか？一昨年の「百年の森」の総会で記念講演をおねがいをした当時の林野庁林政部長の末松弘行氏によれば、「日本の森林は荒廃しているのではなく、今ほど豊かな時代はない」そうである。

たしかに現在の日本には国内の木材需要のすべてをまかなえるだけの豊富な森林の蓄積があり、人工林を中心に毎年増加し、過去十年間にその蓄積量は二十%増加している。

だからといって、日本の森林が豊かだと喜んでばかりはいられない。これだけ豊かな森林がありながら、使わずに放置し、海外の資源に依存し続けている状況は決して望ましいことではない。

格安の輸入材が入ってくると、国産木材の利用が低迷し、林業人口が減少するため高齢化し、間伐や下刈りなどの手入れが行き届かなくなる。いまや人工林などは放置されているのがあたりまえの状態になりつつある。

江戸時代には薪などの燃料として使うためにどんどん木が切られついにハゲ山になってしまった森林が、現在みごとに青々とした山々に復活した。その時代

から植林したのは日本だけだそうで、日本の先人達に敬意を表したい。

最近の円安の影響で輸入材は高騰を続けており、国産材に対する価格面での優位は崩れつつあるという。

埼玉県も、県産木材を使った一戸建て住宅を増やそうと県が補助金制度を創設し、募集を始めた。それは木材の伐採を加速して林業を活性化させるとともに、二酸化炭素の吸収力が大きい若木を増やして温暖化対策に役立たせる狙いもある。また、環境改善への期待もある。県内の人工林の八割は樹齢四十五年を超えており、若木の植林がなかなか進んでいない。助成による林業の振興で、「木の世代交代を促すきっかけにしたい」と県森づくり課は期待しているという。

埼玉県に隣接している群馬県側に富岡市がある。最近、富岡市の富岡製糸場が世界遺産に登録され、一大観光ブームが起きている。

世界遺産は千九百七十二年にユネスコで採択された「世界文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）に基づいて世界遺産リストに登録されたもので、移動の不可能な不動産やそれに準ずるものが対象となっている。

最近では世界農業遺産（国連食糧農業機関が認定）が登場した。これは、世界遺産が「手つかずの自然のままの状態」で保存されることを前提としている。それに対し世界農業遺産は、時代の変化や環境の変化によって移り変わりながらも、代々引き継がれてきた知恵の蓄積が

遺産であるという考え方に基づいている。（武内和彦氏の世界農業遺産より）

これらにたいして、私は、世界の温暖化対策、森林生態系保全管理のために、世界森林遺産があってもよいと思う。

世界森林遺産は前提条件が丁度、世界遺産と世界農業遺産との中間であると思う。

世界森林遺産は①人の手が入っていない自然のままの森林（例、白神山地など）と、②人が手を入れた人工林（メンテナンスが必要、に分けられる。森林遺産②に指定されたら、間伐や下刈りなどの手入れが義務付けられる。メンテナンスをやることにより、地滑りや洪水などの自然災害の予防対策にもなる。

戦後七十年のいま、日本の森林の木は伐り時になっているにもかかわらず、木を伐らない。なぜならその木を使ってもえられないからである。そのためにも我々は国産の木材を使うようにしなければならぬ。

美しい森林の再生、里山の復興は我々にとつての使命であり、今後も全力を尽くしたいところである。

中国の格言に「先人、木を植え、後人、その下で憩う」「先人、木を植えて、後人、涼を得る」というものがある。

先人たちの遺産を感謝の気持ちで活用し将来、子孫達にこの遺産をより良い形で引き継ぎたいものである。

総会・植樹活動報告会 平成26年6月8日

## 『放射能汚染と森林整備』



報告会

元田村森林組合森林整備課長

吉田 徳義

皆さんこんにちは

ただ今ご紹介をいただきました、吉田徳義と申します。私は福島県にあります田村森林組合に42年間勤め、今年5月末で定年退職致しました。

在職中は販売課、森林整備課に於いて森林の保育や木材の販売業務はもちろん、林業労働災害防止協会福島県支部からの委嘱を受け、安全衛生指導員としての仕事、福島県林業労働力確保支援センターが行っている緑の雇用現場技能者育成対策事業の仕事、そして一般社団法人フォレストサーベイが行っている作業道作設オペレーター育成研修の講師など、幅広い経験をさせていただきました。

こうした中で「NPO法人 百年の森づくりの会」の皆様と知り合うことができ、去る4月6日には50名余りの方々にご参加をいただき、ブナの苗木を植えていただきました。帰りには小雪が舞う寒い中での作業でしたが、いま若葉を広げ順調に育っております事をご報告申し上げます。本当にありがとうございます。

今年から福島県内では原発事故に伴う森林の放射性物質低減効果を目的に「ふくしま森林再生加速化事業」が実施されております。これに先立ち昨年度、福島県の田村市といわき市内の三か所で実証事業が行われ、その中の一つを私が担当致しましたので、今日はその事業内容や県が取りまとめた内容についてお話させていただきます。

放射性物質に伴う調査とその解析は専門家3名で行っております。常葉地区の対象森林面積は21.09ha、杉が中心でその樹齢は40年から50年生で樹高は20m前後、胸高直径は30cm前後あります。放射線量の測定は地上1mとヘリコプターで上空から測定しており、その結果から標高620m以上、東向き斜面で空間放射線量率が高く、西側斜面では低い傾向が見られます。震災事故当時の東風に乗って放射性物質が運ばれて来たものと思われま。

間伐前と間伐施業後、施業1カ月後の放射線量は自然減衰分を除外した変化率に分けて測定しています。空間線量率の平面的な分布傾向

は大きく変化していません。地上において様々な測定を行い、間伐することとどれだけの効果が出たのか調査しています。結果は樹種によって様々な違いが出ています。最も大きかったのはアカマツ及び広葉樹の更新伐で12%程度低減しています。スギについては明確な差異は認められませんでした。間伐後に枝葉の収集を行ったスギのエリアでは空間放射線量率の低下が大きく、施業エリア内の線量率は全般的にマイナスで放射性物質は減少傾向にあります。

その他として作業路は土を掘り起こし、新しい土と入れ替えることにより路面上での空間線量率が下がっている事が分かります。またスギの間伐エリアで森林施業直後に測定値が大きく上昇する傾向が見られました。これは間伐で枝払いした枝葉が地表面に散乱した影響と推測しています。標準的な形状をした木を選び、葉・枝・樹皮・辺材・心材を採取して放射性セシウム濃度を測定したところ、樹種ではコナラが一番高くヒノキ、スギと続きます。全樹種で落葉が占める割合が75%以上と最

も大きく、立木についてみると、スギは葉と樹皮に、アカマツとコナラは枝と樹皮が占める割合が大きい結果となりました。

落葉に溜まった放射性セシウムは土壌中においては5cm以内に殆どが留まっています。全体的な傾向として木の内部に当たる辺材・心材の放射性セシウム濃度は葉・枝・樹皮に比べ非常に小さい結果となりました。スギは辺材と心材の濃度が拮抗しており、一部試料では心材のほうが高濃度のももありました。アカマツは葉の濃度にバラツキが大きく原子力発電所事故当時の葉が更新しつつあることによるものと思われる。コナラの葉は樹皮や枝に比べ低濃度ですが、数百Bq/kg検出されました。

三地区における航空機による空間放射線量は赤い部分が高く事故当時から7カ月後、更に1カ月後と下がって来ている事が分かります。次に木を割ってどの部分にセシウムが付いているか、また樹皮がついた状態と樹皮を剥ぎ取った状況の二通りのオートラジオグラフィ調査を行なっ

ています。その結果樹木の中は全く問題がなく木材を利用出来る事が分かりました。

「ふくしま森林再生加速化事業」を実施した結果、田村市常葉町に於いては全体面積21.09haの内スギ間伐を14.08ha間伐率20%～30%、スギ、アカマツの更新伐（抜き伐り）においては3.40haを切つて、放置されていた分を含め4.60haにスギを植えました。また搬出のための作業道を新設で2,355m・既設作業道補修を4,144m行っています。

調査結果から

- ・標高620m以上、東向き斜面に空間放射線量が高くなる傾向があった。
- ・空間放射線量率（地上高1m）樹木部位毎放射線セシウム濃度の関係は、ほぼ相関が見られた。
- ・原発事故後約1年半後時点での樹木内部（辺材、心材）の放射線物質濃度は最大でも280Bq/kgと低濃度であった。
- ・森林における放射性物質の分布は落葉・土壌に80%程度の放射性物質が分布する。

森林整備後のデータから得られた結果

- ・作業範囲における、空間放射線量率の低減効果は、作業範囲境界部

から作業範囲中央部へ向かって約20～30mで変化がなくなる傾向があった。

・枝葉を集めることで空間線量は上がる。  
・森林整備1カ月後においては、谷地形の傾斜の変化点や出口付近で空間放射線量率が上昇傾向にあった。

放射性物質は移動してどうしても高くなる部分が出てきます。全体的に検証して注視する必要がある今後とも継続的に調査を進めこととしました。

常葉地区の施業地の空間放射線量率は0.304～3.824 $\mu$ Sv/hの範囲で平均は0.718 $\mu$ Sv/hであった。標高650m700m弱の地点では3.124 $\mu$ Sv/h、森林地帯は1.0～3.8と4 $\mu$ Sv/h近い数値になつている。我々が住んでいる地点は400m前後0.3 $\mu$ Sv/hぐらいで国の基準は0.23 $\mu$ Sv/hなので除染する必要が有ります。

放射性セシウムの物理的減衰表から当時H23・4・1福島市において2.80 $\mu$ Sv/hあり、それを基点100（%）とした場合放射性物質を単純に半減期での減衰を考慮すると、放射性物質濃度は6年後には約1/2、30年後には約1/4に減少し、放射線量率は3年後に約1/2、30年後に約1/7に減少するとしてお

り、森林における放射性物質の影響は、今後も減少していくものと思われれます。

この事業で実施した、樹齢50年のスギの林は今回の間伐で三回目になります。林床に光が届くようになり植生も回復し、素晴らしい森林となりました。

皆様に、先日植えていただいた場所は西側斜面で比較的放射線量を避けた場所であり、そこに小さなブナの苗やその他の苗を1350本植えた事になります。

今回実施した「ふくしま森林再生加速化事業」の報告になるわけですが、環境省は一般の人は山に出入りしないので放射線の影響も少なく山の除染はやらないと言っています。

森林で働く作業員や里山に住む住民は長い目で見ると放射線の影響を受けるため、林野庁に対し除染を要望しております。いずれにしても山で働く者にとつて放射能は大きな問題です。組合の緑の雇用の研修生二名も原発事故後、山梨県へ避難のため行ってしまいました。若い人は子供の事もあり心配なのです。何とか山を守る者にとつては留まって欲しかったと思っております。

昔の山は農家の仕事や楽しみとも密接に繋がっていました。スギ、アカマツ、クリなどは住宅の部材として使い、広葉樹に於いては秋の山き

のこ採り、しいたけ原木としての販売や薪、炭を作つて燃料として使い、また落ち葉で堆肥を作り、それを田畑に使つて米や野菜を作っています。それら食べた排泄物までも使い自然の恵みを循環していた訳です。福島県のしいたけ原木は関東、中部、近畿、四国、九州と全国に出荷していましたが、今では1本も出荷出来ない状況にあります。野菜、米などは福島県から出荷されるものが放射線量を測り線量の有るものは出荷されておりませんので、安心して食べて頂きたいと思えます。

外材や化石燃料の輸入と共に林業は衰退し年をとつた者だけになり、今回の原発事故に伴う放射能汚染で、更に使われなくなり、その循環が壊されてしまいました。山の在り方を考えると将来が危ぶまれます。

先人達が一生懸命守り育てて来た木材の利用が進んでいません。是非とも木材を使って欲しいと思つています。先人の思いを繋いで行くという事が大切であり、私も今までの経験を活かし、これからの人生においても森と関わって行きたいと考えております。また百年の森づくりの会の皆様ともこれを機に何かできればと考えています。本日は、このような機会をつくつて頂き誠にありがとうございました。

# 「大陽寺植林地地下草刈り・ツルきり事業」の終了の提案

大陽寺 事業担当 高岡 正彦

## 大陽寺植林地における事業

02年4月29日

「荒川源流森づくり体験」事業開始

大陽寺敷地内0.4ha(県貸借地)に

300本のブナ・ヤマザクラ・栗・

ミズナラ・コナラ・トチノ木を植樹。

100名参加

02年9月29日

「大陽寺植林地観察会」

下草刈り。67名参加

03年7月27日

04年7月25日

05年7月23日

06年6月9年

10年

現地観察。  
鹿よけネット巻き

路続きの場所では、多くの会員に参加してもらえない」という意見が多く聞かれるようになりました。そこで、県の担当課に、山岳地帯ではなく奥山地域での植林等の活動可能地の提供を相談したところ、大陽寺の参道沿いの敷地を紹介いただきました。そこは県が大陽寺から借受け「杉・ヒノキ」を植えていた場所で、更新の際にその半分に広葉樹を植える了解が得られ、その作業が百年の森づくりの会に任されることになったのです。

最初の植林は02年4月29日(当時みどりの日)に『荒川源流森づくり体験』を行いました。幼い子供を連れた家族、年配のご夫婦、高校生等100名ほどが参加しました。天候に恵まれ絶好の植林日和?でした。程よい汗をかき参加者はとても満足げでした。県の広報で参加を募ったとはいえ、交通の不便なこの地にこれほど集まっていただけたことにスタッフが喜ぶと同時に、参加者皆も感動していました。県の方には地ごしらえ、苗の準備、植林作業指導をいただいた。また、大滝村長も参加いただき、村から心のこもった

昼食の提供もありました。(会報4号掲載)

下草刈りとして02年9月29日に『大陽寺植林地観察会』を行ないました。下草の伸びはさほどではなく作業は程なく終えました。昼食には中津芋をいただき、今回も大滝村からの差し入れもありました。参加者は「水源の森」づくりに益々意義深さを感じていました。午後は苗木作りのためのドングリ拾いをしました。(会報5号掲載)

翌年03年4月26日中津川支流山吹沢周辺の県有林の植林『第2回荒川源流森づくり体験』を始めました。

大陽寺植林地同様、山岳経路が無い多くの県民が参加できる植林地域を探していたところ、県有林の伐採地をお借りすることができました。こは、2.2haという誇大な土地であり、南向きの滑らかな斜面でした。長い年月かけて計画的に進める必要を強く感じました。以後しばらくは、『和名倉山植林地』の他『大陽寺植林地』『山吹沢植林地』への植林事業が同時平行して行なわれるようになりました。

03年7月27日の大陽寺植林地の下

草刈りには78名が参加。(会報6号掲載) 苗を被うほどの下草を長柄の鎌で刈り込みました。赤いリボンをつけた苗を避けて、周りの草を刈り込みます。草刈体験自体も貴重ですが、作業後の鎌の刃研ぎの指導を受け、今後も森づくりにたずさわりたいと新たな意欲がみなぎっていました。このときからヤマザクラの木だけが若芽を齧られているのを確認しています。

04年・05年の下草刈りは2日間かけて大陽寺と山吹沢の植林地の下草刈りを行いました。宿舎は旧大滝小学校三峰分校をお借りしました。大陽寺の下草の伸びがおさまりましたが、今後はツルの心配をしなくてはならないとのことでした。生育状況としては、ヤマザクラがほぼ全滅、トチノ木は残存数が少なく、ミズナラ・コナラはやや不良、ブナ・クリの生育は極めて良好でした。

06年9月9年は下草も無く、ツルの伸びも無かったので観察のみで作業は行ないませんでした。特にブナ・ミズナラ・クリは立派に育っていました。その間の07年10月から新たに長瀬町宝登山における植林事業が始

百年の森づくりの活動は97年から和名倉山で始まり、00年「百年の森づくりの会」として発足。すぐに賛同者が集まり、会の活動が一気に注目されるようになりました。01年に作業道が確認できたことにより、和名倉山への植林活動が本格的に始まりました。

活動に期待が益々高まる中、活動場所が『山の中、それも不明瞭な悪

まりました。ここには420名で855本の苗を植えました。(会報15号掲載)以後毎年100名を越える参加者で下草刈りを行なっています。

10年、大陽寺植林地の外回りのネットが倒れ、鹿が自由に出入りできるようになってしまいました。(大量の鹿の糞を確認)そこで、苗木1本ずつにネットを巻き防除することにした。この年以降毎年6月中旬に『大陽寺植林地ツルきり作業』としてツルきり・鹿よけネット巻き作業に出かけています。作業後は旧大滝小学校三峰分校へ移動し、その整備をすることが恒例になっていました。

14年今年の作業では、ブナ・栗が大きく育ち、ミズナラも本数は少ないが順調に成長しています。今回は陽の差込のあるスペースにブナの苗木5本を追加で植えました。

この状況【①過去5年間の作業が軽微なものになったこと。②参加者が減ったこと。③里山での植林・育林活動として長瀬宝登山での事業があること。】から今後は公開事業とすることは必要ないと考えています。しかし、今後も現地調査は行なうてその結果、なんらか手を加える



2014. 6. 21  
樹齢20年のブナ



2014. 6. 21  
植林したブナ

必要があれば皆様の力をお借りしたいと思えます。長い間お世話になりました。

追伸、私たちが、大陽寺に植林した後の05年?から大陽寺に新しい住職(浅見宗達氏)が就いています。就任から2年ほどして宿坊の運営も始めたそうです。最近では、この禅寺大陽寺は「日本のマチュピチュ」とも呼ばれ、11年日本経済新聞の全国宿坊ランキングで1位(2位以下を引き離し)を獲得しています。

2014年度上半期

## 和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当 高岡正彦

2013年度下半期

10月26・27日 第33回植林ワーク

松葉沢の頭までの偵察。ネット修理

11月22・23日 仁田小屋しまい

仁田小屋への荷揚げ。和名倉山頂直下のシラビソネット巻き

(50本)

2月15日 豪雪

仁田小屋びらき(3・29・30)は中止

5月25・26日 第34回植林ワーク

(仁田小屋と和名倉山と東仙波山と大洞林道)

2月の豪雪以来、雲取林道は頻繁に落石があり危険な状態です。そして以前設置してあった鮫沢橋の施設はこの時点で、かかっています。この橋付近までの林道は重機で整備されていますが、その先は何ヶ所も土砂・大石が林道を封鎖しています。(鮫沢橋の先に大洞ダムがあり、その関係でこの付近までの林道は整備されるのだと思われまます。)

小屋に到着後は早々に小屋下のくずれたフォレストベンチの修復を行ないました。今後、大量の鉄のタンカンを荷揚げして修復する必要がありますと考えています。



に自転車を積み、鮫沢橋の先は自転車ではいる人もいます。我々も、車はここに置き、徒歩で林道をつめることにしました。この先の荒沢橋の奥は、豪雪による雪崩で樹木がなぎ倒され小さな沢は倒木で埋まっています。この日の天気は快晴で最高のハイキング日和でした。

翌日は、和名倉山の偵察をして東仙波山周りの周回コースをたどるところにしました。

仁田小屋尾根は雪の影響を受けず、むしろ庄雪によって盛り上がり、鹿の糞が落ち着いたようでした。鹿の糞の跡を見ると、鹿の往来が減ったように思われます。鹿の鳴き声も以前は頻繁にあったのですが、最近山に在る間にまったく聞かないこともあります。それでも鹿の被害が無くなった訳ではないので、対策は必要だと考えています。写真は、山頂からナシ尾根に伸びる尾根上と山頂です。せめて、今生きている樹木を守る必要を感じています。

山頂から将監峠への尾根上には石楠花が密集しているところがあります。鹿は石楠花をよく食べます。この石楠花も保護が必要だと考えてい



ます。また、カバアノ頭を見通せる付近にヤマザクラの群生地があります。開花の季節はさぞや見事だろうと思いつながら足を進めました。東仙波山の山頂の手に仙波尾根への下山路があります。下山路入り口付近は丸みを帯びていてガスなどがあつて見通しが無いと間違えてまつたく違う尾根を進む危険があります。今回は快晴で、カバアノ頭が見通せましたので、問題なく下山路を選べました。その後のルートは、まだまだスズタケの藪があり思った以上に時間がかかりました。この藪の中は獣の道が無数に交差しています。その中から適切な道を選びながらの下山です。いわゆるルートファイディング能力を試されます。藪を越えたあと尾根から離れて、急坂を下ります。下った後には写真のような大木の林が広がります。ブナ、シオジの大木で、直径1m以上あるものが何本もあります。こんな原生林は中々出会えないものです。秘密にしておきたいものですが、百年の森づくりの会の皆様にだけ紹介します。(実は



インターネット上にはすでに公開されてしまっていますが)さて、ルートは再度尾根に取り付きます。危険箇所が続きますが、この後は割合明瞭に踏み跡をたどれます。降りつく場所は惣小屋谷と井戸沢の出合です。ここから100mほど急登を登り林道に出なければなりません。結局、林道に出るまでに10時間かかり、鮫沢橋の車のところにたどり着くまでにさらに2時間かかりました。天候には恵まれましたので、体力を使い切ったというわけではないのですが、緊張の連続のルートでした。気力をしぼり出しながら最後の林道を歩きました。

和名倉山では、戦後、木材の活用のために大量の樹木が切り出されました。ほぼ皆伐状態まで切り出した頃の64年(昭和39年)に、作業人の火の不始末から山火事が起こり、和名倉山山頂付近の400haが焼けたそ

うです。さらに、69年(昭和44年)にも東仙波山付近の300haを焼く山火事があったそうです。その後、輸入材に押され林業が衰退し、和名倉山で仕事が無くなり、同時に、人間の往来が無くなり藪化していったようです。

その和名倉山を以前のような森に作り直すというコンセプトで97年に埼玉大学WV部OB会の活動が始まりました。まずは仁田小屋尾根(旧大滝村村有林)での活動の承認を受け、00年には埼玉大学から独立し「百年の森づくりの会」を発足させ。01年(21世紀最初の年)に初の植林を行いました。以後、植林地整備、植林、仁田小屋の再建、鹿よけネット張りなどを続けてきています。最近では山頂付近のシラビソにネットを巻くことを中心に活動しています。今回は、久々に仁田小屋尾根と和名倉山と東仙波山と大洞林道の周回コースをたどり鹿などの食害調査を行ないました。

先日、『和名倉山の二瀬尾根ルートに秩父山岳連盟と県警山岳救助隊が指導標を立てた』という新聞記事がありました。記事にもあるように、原生林の残る和名倉山を堪能してほしいとともに、この山の自然を後世につなげる活動の必要性を再確認しました。手付かずの自然はそのままに、一度手をかけた森は手放さずに責任もって守ることが大切だと思うのです。

2014年8月24日(日)

# 長瀬町宝登山下刈り活動報告

今年も晴天に恵まれました。昨年は大変暑い中での作業でしたが、今年は、作業中は雲がかかっていたため、直射日光が避けられ、さらにちよよい良い風が吹いていたので、暑いことは暑かったのですが、どなたも体調を崩す人無く無事に作業を行うことができました。百年の森づくりの会から12名、中条さんグループ4名、内藤さんグループ8名、そして今年も三井住友海上火災保険

大きく立派に成長しています。栗の木にはたくさんにイガが付いていました。おかげ様で、今年も一人の怪我も無く、12時には作業を終了することができました。参加いただいた皆様には、ご苦労いただきましたことに厚く御礼申し上げます。

(事務局)

(株)様から66名、合わせて90名の参加をいただき、事業を実施することができました。当会高岡副理事長と三井住友海上火災保険(株)の飯村埼玉支店長様のご挨拶をいただき、その後徒歩やロープウェイでそれぞれ現場に向かいました。10時には皆さん現場に到着し、道具の扱い方や熱中症などの作業中の注意が行われ、準備体操も行い、7班に分かれ下草刈り作業を開始しました。植えられた苗木は、皆、草丈よりも大



# 平成26年度第7回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の平成26年度第7回通常総会が、6月8日(日)浦和あけぼのビル(全電通埼玉会館)において開催されました。

当日は、平成25年度事業報告・収支決算案、平成26年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。

総会終了後、4月6日(日)に行われた福島県田村市における東日本大震災復興支援「百年の森づくり」の植樹活動の報告会を実施しました。

はじめに、「放射能汚染と森林整備」と題し、福島県田村市の田村森林組合前森林整備課長の吉田徳義氏から、放射能汚染の除染がなかなか進まない森林の現状と福島県が取り組んでいる除染除伐作業などについてお話を伺いました。

そして、東日本大震災の復興支援として百年の森づくりの会が取り組んでいる経緯から実際に植樹活動に至るまでの報告会を行いました。

植樹の当日は、小雪がちらつく天候でしたが、皆さんの力で無事植樹でき、植樹した苗木の最近の育成状況を吉田さんが写真に撮ってきていただきましたが、若葉をつけてすくすく育っていることが確認できました。

東日本大震災復興支援の方法はいろいろなカタチがありますが、森林や植樹による復興支援活動の方法もあることを全国に知らしめることができればと思っています。

(講演・報告会の要旨は別途記載)



総会



福島復興植林

■新会員（会員番号 氏名 住所）2014.10～

963 笠原佐和子 深谷市 / 964 杉岡雄仁 東京都

和名倉百年の森 第28号 2014年10月1日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会 坂本和穂

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂三丁目12-9 農林会館地下1階 TEL/FAX：048-831-1469

<http://www.100nen-forest.org> e-mail：[info@100nen-forest.org](mailto:info@100nen-forest.org)